ヒューマン・ケア研究　第11巻　第１号
2010年５月　9-20頁

Journal of Human Care Studies Vol. 11 No. 1
May 2010, pp 9-20

原　著

IPA（Inventory of Parent Attachment）日本語版の作成及びその信頼性・妥当性の検討

福井　義一*・河合　三奈子*

Development of Japanese version of Inventory of Parent Attachment and examination of its reliability and validity

Yoshikazu Fukui*, Minako Kawai*

Abstract

Aims: This study aimed to develop a Japanese version of the Inventory of Parent Attachment（IPA）（Armsden & Greenberg, 1989）to measure adolescents' attachment to their parents, and to examine its reliability and validity.

Methods: University students were surveyed and the data were analyzed using factor analysis.

Results: The result of factor analysis confirms a common factor structure with the original version for both father and mother. The factors extracted were trust, alienation, and communication, and their internal consistencies were sufficiently high. On top of that, re-test reliability was also sufficiently high, and it is concluded that the scale has high reliability. When correlation analysis was carried out for attachment, nurturing attitude and psychological health; trust and communication, which are positive subscales of the IPA, correlated significantly with secure attachment, positive nurturing attitude and psychological health, while alienation, which shows negative attachment, correlated positively and significantly with unsecure attachment, negative nurturing attitude, and psychological distress.

Conclusion: The above correlations were more prominent among females compared to men. These results confirm the Japanese version of the IPA has sufficiently high validity.

Key words: adult attachment style, adolescence, attachment to parent, gender, Inventory of Parent Attachment.

はじめに

Bowlby（1969, 1973, 1980）によって愛着理論が提唱されて以来、乳幼児期（e.g. Ainsworth et al., 1978）から青年期・成人期（e.g. Main & Goldwyn, 1984）まで様々な発達段階を対象に研究がなされてきた。中でも、青年期以降の愛着の個人差研究は、以下の二つの流れを軸として進められている（安藤・遠藤, 2005; Simpson & Rholes, 1998）。第一に、早期の親子関係が生涯発達全般に強く影響することを前提として、“過去の自己と養育者との関係”についての現在の認知を問う

* 甲南大学・八幡市福祉センター（Konan University & Yawata Social Welfare Center）

受稿2009.10.5　受理2010.3.16

もので、Main et al.（1985）が開発したアダルト・アタッチメント・インタビュー（Adult Attachment Interview: 以後 AAI）がその代表である。AAI は、幼児期における父母との愛着関係などについての半構造化面接であり、語られる内容やその一貫性、面接に対する構えなどによって成人の愛着表象を分類する手法である（久保, 2003）。AAI では通常は意識化されることのない内的ワーキングモデルを測定できると仮定されている[1)]。

第二の流れは、過去の親子関係ではなく、“現在の親友や恋人、配偶者などとの関係性や一般的な対人関係の実態”を問題とするもので、独自に開発された質問紙法によって、意識的に想起される関係性の側面を捉えようとするものである。こうした観点からいくつかの愛着尺度が開発されており、それらは青年の“恋人”への愛着スタイル（Brennan et al., 1998; 中尾・加藤, 2004a）や“一般他者”への愛着スタイル（Hazan & Shaver, 1987; Bartholomew & Horowitz, 1991; 詫摩・戸田, 1988; 中尾・加藤, 2004b）を捉えることを意図している。これらの研究で測定される愛着スタイルは、意識化された内的ワーキングモデルを反映していると思われる。

こうした二つの流れに含まれていないのが、“現在の親との愛着関係”という視点からの研究である。青年期は、一般的に親から自立する過程にあると同時に、友人や恋人など親以外の対象との関係性が深まる時期であり、後者との関係の方が重視される傾向にある。そのため、この時期の親との愛着関係は比較的軽視されている。しかし、親から離れて自律的にふるまおうとする動きは、一種の探索行動と捉えることができる（安藤・遠藤, 2005）。マクロな視点で捉えると、乳幼児期の探索活動と比べてその外界での活動範囲や活動時間、関係性は広がり複雑化するものの、我々は思春期以降においても親への愛着を基盤として、新たな対人行動や社会活動を促進するという形の探索活動を行っているのである。それゆえ、青年期の親との愛着関係もまた、心理的健康や対人関係の発達における重要な要素であると言える。

Armsden & Greenberg（1987）は、青年期の親への愛着を測る尺度として IPA（Inventory of Parent Attachment）を開発した。IPA は Bowlby の理論に基づいて、愛着対象の応答性や接近可能性に関する信頼感について、情緒的・認知的側面から青年期の愛着を捉えている（Lyddon et al., 1993）。尺度化は、大学生を対象に行われており、因子分析の結果、「親は私の気持ちを尊重してくれる」などに代表される“信頼感（Trust）”因子、「私は親からあまり関心を向けられていない」などに関係が深い“疎外感（Alienation）”因子、「私は問題や悩みなどを親に話す」などを含む“コミュニケーション（Communication）”因子という 3 因子が抽出されている。信頼性分析による内的整合性も高く（α =.86-.91）、さらに 3 週間後の再検査信頼性（r=.93）も高いことから尺度の信頼性は保証されている。また、理論的に関連がある家族特性、家族内での自己評価等との相関関係を検討することで、理論的な妥当性も確認されている。なお、IPA 作成当初は、親の性別を考慮せずに“親への愛着”と表記されており、調査対象者との間の関係性が父親と母親で異なっている場合には、より大きな影響を受けてきた方の親への愛着について回答させていた。その後、対象を父親と母親とに分けて評定するように改訂された（Armsden & Greenberg, 1989）ため、本研究ではこの改訂版から日本語版を作成した。

これまで、IPA は親への愛着を捉える際に、高

註 1）AAI は、そこでの語り方の特徴からアタッチメント表象への近接のあり方を捉えるものであるが、個人のアタッチメントシステムの活性化を促すよう工夫されており、通常は意識化し得ないようなアタッチメントに関する情報処理過程の個人的特性を抽出するという特徴がある。一方、後者は質問紙法によってアタッチメントの個人差を測定するため、AAI のような表象レベルのワーキングモデルというよりは、個人が意識的に想起し得る関係性の実態を問題としている（安藤・遠藤, 2005）。

い信頼性と妥当性を備えた尺度として多くの研究で使用されてきた。Armsden & Greenberg（1987）は、親への愛着が自尊感情や生活満足度といったwell-beingと強く関連し、抑うつや不安、疎外感などの感情状態には負の方向で影響を及ぼしていることを報告した。Wilkinson & Walford（2001）も同様に、親への良好な愛着がwell-beingと正の関連を持ち、怒りやネガティブな感情と負の関連をもつことを示している。また、Papini & Roggman（1992）はコンピテンスや抑うつ、怒りと、Noom et al.（1999）は自律性や社会的適応との関連について検討している。こうした、IPAを用いて青年期の精神的健康との関連を調べた研究からは、概ね上記のように、親との愛着と精神的健康との関連が確認されている。さらに、IPAから算出された愛着得点は、アイデンティティの発達（Lapsley et al., 1990）や学校適応（Cotterell, 1992）、性役割（Haigler et al., 1995）、ソーシャルスキル（Engels et al., 2001）など様々な変数との関連が確認されている。

一方、わが国では、藤井（1994）が翻訳したIPAを用いて大井ら（2006）や井上ら（2006）が研究を行っており、高木（1994）も独自に訳出しているが、信頼性・妥当性を備えたIPAの日本語版が未だ作成されていないため、上記のような研究がほとんどなされていない。IPA日本語版を作成することによって、青年期においてこれまで検討されてきた恋人や友人、一般的な他者との関係に加えて、親との愛着関係を捉えられることになり、このことは青年期の愛着研究の広がりにとって重要な意義をもつと考えられる。

そこで、本研究では、IPAの日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを研究1の目的とした。IPAが親との愛着を適切に測定できていれば、親との愛着の肯定的な側面は、養育態度の肯定的要素や安定型の愛着スタイル特性と正の相関を示すのに対し、否定的な側面は、同じく養育態度の否定的要素や不安定型の愛着スタイル特性と正の相関を示すことが予測される。また、親との愛着の肯定的側面は、心理的健康と有意な関連があるだろう。なお妥当性を検討する際、愛着や養育態度が心理的健康に与える影響に性差が報告されている（福井・河合, 2005; 河合・福井, 2005）ことから、男女別に分けて検討を行った。さらに、作成されたIPA日本語版の再検査信頼性について調査することを研究2の目的とした。

研究1

方　法

調査協力者

近畿圏の四つの大学の学部学生1187名（男性556名、女性606名、無記名25名）の協力を得た。平均年齢は19.6歳（SD＝1.39）であった。心理学関連科目の講義中に口頭で同意を得た上で、集団法により無記名で実施した。調査時期は2005年7月から2006年11月までであった。なお、最大母数は1187名であるが、四回の調査で少し尺度構成が異なっているため、尺度毎に若干の人数の変動がある。

翻訳過程

Armsden & Greenberg（1989）の作成したIPPA（Inventory of Parent and Peer Attachment）について、原版の著者であるGreenberg氏に日本語版作成の許可を得た上で、仲間（peer）への愛着を除いて、母親と父親についての各項目を翻訳した。英語に堪能な者2名のチェックを受けて自然な日本語になるよう修正をくり返した。

尺度構成

両親への愛着を測定するために、上で翻訳したIPA日本語版を用いた。本尺度は父親・母親ともに同内容の25項目からなり、5件法で評価された。質問票には本研究では使用されない尺度も含まれていた。また、フェイス項目として、年齢と

性別の記入を求めた。

また、基準関連妥当性を検討するために、以下の尺度を用いた。養育態度を測定するために、PBI（Parental Bonding Instrument）（Parker et al., 1979）の邦訳版（北村, 1995）を用いて、父親と母親についてover-protectionからautonomyの軸を規定するprotection（干渉）得点と、careからneglectの軸を規定するcare（愛情）得点を得た。

成人愛着スタイルを測定するために、親密な対人関係体験尺度の一般他者版（ECR-GO）（Brennan et al., 1998）の邦訳版（中尾・加藤, 2004b）を用いて、「親密性の回避」と「見捨てられ不安」の二つの下位尺度得点を得た。また、内的ワーキングモデル（以後、IWM）尺度（詫摩・戸田, 1988）を用いて、安定得点・アンビバレント得点・回避得点の三つの下位尺度得点を得た。

心理的健康度を測定するために、以下の尺度を用いた。自尊感情を測定するためにRosenberg（1965）の自尊感情尺度の邦訳版（山本ら, 1982）を用いて、その合計点を自尊感情得点とした。また、抑うつの程度を測定するために、Radloff（1977）によって開発されたCenter for Epidemiological Studies Depression Scale（以後CES-D）の邦訳版（島ら, 1985）を用いて抑うつ得点を算出した。さらにSpielberger et al.（1970）によるState-Trait Anxiety Inventory（以後STAI）の日本語版（清水・今栄, 1981）を用いて、状態不安と特性不安を測定した。

結　果

統計分析にはSPSS Statistics 17.0を使用した。最初にTable 1に父親と母親に対するIPA各項目の平均値と標準偏差を示した。項目3について両親共に床効果が見られたが、“疎外感（Alienation）”を示す中心的な項目であるため、除外しなかった。また母親の項目10、18に床効果が、項目22に天井効果が、両親とも項目2に天井効果が見られたが、これらもその程度が許容範囲内であると思われるため除外しなかった。

母親と父親に対する愛着を別にして、主因子法による因子分析を行った結果、項目14の共通性が.10前後と非常に低かったため削除し、さらに因子分析を行い、固有値の減衰状況と解釈可能性から、原版通りの3因子解を採用した。再度主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、その結果から因子負荷量が.35を下回る項目7を除外してさらに因子分析をくり返した。次に母親について因子負荷量が.35を下回った項目23を削除して因子分析し直し、さらに含まれる因子が両親間で異なっていた項目21を除外した結果、父親、母親共に共通の因子構造が得られた。その結果をTable 2示した。母親については3因子で分散の57.2%、父親について59.9%が説明できた。

Armsden & Greenberg（2004）や西本（2001）において、母親と父親では愛着の因子構造に若干の違いが報告されているが、本研究ではわずかに一項目が別の因子に負荷しているに過ぎなかったため、両親で採点方法を同一とした。因子間相関は総じて高かった。また、各因子について信頼性分析を行った結果、信頼性係数は.84から.92の範囲内と高く、本尺度の内的整合性が確認された。

Table 3に各下位尺度と原版（Armsden & Greenberg, 2004）に従って算出した愛着得点の男女別平均得点を示した。愛着得点は、親に対する肯定的な愛着を示す信頼感とコミュニケーションの合計に、否定的な意味合いの疎外感の各項目の値を逆転して加算したため、得点が高いほど愛着が肯定的であることを示す。性差を検討するために、*t*検定を行った結果、母親疎外感と母親コミュニケーションに有意な性差が見られ、前者は男性の方が、後者は女性の方が有意に高かった。また、愛着得点も女性の方が有意に高かった。

また、Table 4に下位尺度間の内部相関を示した。因子間相関で示された通り、信頼感とコミュ

Table 1　IPAの各項目の平均値と標準偏差

質問項目	母親		父親	
	MEAN	SD	MEAN	SD
1. 母親は、私の気持ちを尊重してくれる。	3.775	.909	3.554	1.128
2. 母親は、親として立派にやっていると思う。	4.292	.888	3.997	1.136
3. 今の母親が違う人ならいいのにと思う。	2.006	1.370	2.240	1.423
4. 母親は、ありのままの私を受け入れてくれる。	3.824	1.025	3.555	1.093
5. 自分が悩んでいることについて、母親の意見を聞きたい。	3.090	1.207	2.741	1.196
6. 自分の気持ちを母親に見せても、何にもならないと思う。	2.566	1.197	2.867	1.254
7. 母親は、私が動揺（狼狽・イライラ）しているのがわかる。	3.670	1.075	2.728	1.122
8. 母親に自分の問題を相談すると恥ずかしい、あるいは馬鹿げた気持ちにさせられる。	2.616	1.258	2.830	1.271
9. 母親は、私に期待しすぎている。	2.614	1.161	2.525	1.225
10. 母親が近くにいると、たやすく動揺（狼狽・イライラ）してしまう。	2.316	1.339	2.637	1.361
11. 私は、母親が思っているよりもずっと動揺（狼狽・イライラ）しやすい。	2.689	1.219	2.807	1.237
12. 母親は、話し合いしているとき、私の意見を重要視してくれる。	3.282	1.000	3.101	1.140
13. 母親は、私の判断を信頼してくれる。	3.489	1.000	3.397	1.093
14. 母親は彼女自身の問題を抱えているので、私は自分のことで母親を煩わせない。	2.824	1.087	2.979	1.153
15. 母親は、私がもっと自分自身を理解できるように助けてくれる。	3.204	1.027	2.889	1.101
16. 私は、問題や悩みを母親に話す。	2.874	1.280	2.125	1.120
17. 私は、母親に怒りを感じる。	2.388	1.237	2.537	1.383
18. 私は、母親からあまり関心を向けられていない。	2.268	1.285	2.484	1.239
19. 母親は、私が困っていることを話せるように助けてくれる。	3.007	1.093	2.573	1.096
20. 母親は、私を理解している。	3.650	1.071	3.183	1.178
21. 私が何かで怒っていると、母親は理解しようとしてくれる	3.267	1.107	2.840	1.140
22. 私は、母親を信頼している。	4.132	.998	3.774	1.203
23. 母親は、私が最近、どんな状態（状況・気持ち）でいるのか分かっていない。	2.940	1.104	3.197	1.160
24. 何か打ち明けて心の重荷を降ろす必要がある時、母親を頼りにすることができる。	3.246	1.203	2.760	1.206
25. 母親は、何かが私を悩ませているのを知ったら、そのことについて尋ねてくれる。	3.166	1.133	2.571	1.152

（質問項目は母親に対する愛着を測定する項目。父親に対する愛着は「母親」を「父親」に、「彼女」を「彼」に置き換える。）

Table 2　両親への愛着の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

母親に対する愛着					父親に対する愛着			
No	項目内容	F1	F2	F3	No	F1	F2	F3
F1: 信頼（α=.883）					F1: 信頼（α=.916）			
1	母親は、私の気持ちを尊重してくれる。	.878	.060	−.105	1	.944	.045	−.106
13	母親は、私の判断を信頼してくれる。	.817	.076	−.068	4	.807	.003	.004
4	母親は、ありのままの私を受け入れてくれる。	.703	−.035	.026	13	.780	.035	.013
12	母親は、話し合いしているとき、私の意見を重要視してくれる。	.696	.036	.013	2	.720	−.006	−.027
20	母親は、私を理解している。	.689	.022	.135	22	.697	−.039	.120
22	私は、母親を信頼している。	.624	−.047	.131	12	.661	−.001	.119
2	母親は、親として立派にやっていると思う。	.531	−.111	.011	20	.623	.037	.256
F2: 疎外（α=.847）					F2: 疎外（α=.837）			
10	母親が近くにいると、たやすく動揺（狼狽・イライラ）してしまう。	.032	.883	.024	10	.045	.854	−.002
3	今の母親が違う人ならいいのにと思う。	−.035	.820	.096	17	−.070	.811	.069
17	私は、母親に怒りを感じる。	−.088	.747	.111	3	−.160	.726	.145
18	私は、母親からあまり関心を向けられていない。	.000	.733	.006	11	.130	.603	−.073
8	母親に自分の問題を相談すると恥ずかしい、あるいは馬鹿げた気持ちにさせられる。	.028	.492	−.245	18	−.169	.560	.053
6	自分の気持ちを母親に見せても、何にもならないと思う。	−.103	.478	−.157	8	.059	.506	−.239
11	私は、母親が思っているよりもずっと動揺（狼狽・イライラ）しやすい。	.039	.469	−.026	9	.149	.427	.041
9	母親は、私に期待しすぎている。	.131	.467	.006	6	.015	.415	−.267
F3: コミュニケーション（α=.873）					F3: コミュニケーション（α=.883）			
16	私は、問題や悩みを母親に話す。	−.193	−.006	.956	16	−.142	−.016	.840
5	自分が悩んでいることについて、母親の意見を聞きたい。	−.003	.020	.749	25	.009	.029	.749
24	何か打ち明けて心の重荷を降ろす必要がある時、母親を頼りにすることができる。	.127	−.011	.712	19	.040	−.008	.744
19	母親は、私が困っていることを話せるように助けてくれる。	.195	.028	.598	24	.135	.004	.700
25	母親は、何かが私を悩ませているのを知ったら、そのことについて尋ねてくれる。	.188	.034	.481	15	.293	.030	.573
15	母親は、私がもっと自分自身を理解できるように助けてくれる。	.334	−.014	.439	5	.204	.005	.507
因子間相関		F1	−.411	.687		F1	−.487	.711
		F2		−.282		F2		−.356

（質問項目は母親に対する愛着を測定する項目。父親に対する愛着は「母親」を「父親」に、「彼女」を「彼」に置き換える。）

Table 3　IPA各下位尺度における男女別平均値と標準偏差

		男性	度数	女性	度数	*t*値
信頼	母親	26.18	(550)	26.68	(603)	−1.603
		5.055		5.491		
	父親	24.29	(543)	24.85	(594)	−1.460
		6.326		6.599		
疎外	母親	20.35	(546)	18.56	(602)	4.353 ***
		7.120		6.819		
	父親	21.27	(546)	20.51	(590)	1.804
		7.170		7.065		
コミュニケーション	母親	17.90	(554)	19.22	(606)	−4.184 ***
		4.881		5.871		
	父親	15.65	(540)	15.63	(593)	.061
		5.272		5.648		
愛着	母親	71.65	(533)	75.58	(579)	−4.774 ***
		12.084		15.307		
	父親	66.59	(527)	68.22	(580)	−1.732
		14.904		16.166		

（上段は平均値；下段は標準偏差：$^{***}p<.001$）

Table 4　IPA各下位尺度の内部相関

		母親				父親			
		信頼	疎外	コミュニケーション	愛着	信頼	疎外	コミュニケーション	愛着
母親	信頼	−	−.188 ***	.625 ***	.782 ***	.470 ***	−.085 *	.290 ***	.347 ***
	疎外	−.531 ***	−	−.016	−.678 ***	−.178 ***	.655 ***	−.135 ***	−.434 ***
	コミュニケーション	.708 ***	−.465 ***	−	.677 ***	.278 ***	.021	.402 ***	.245 ***
	愛着	.867 ***	−.820 ***	.847 ***	−	.409 ***	−.431 ***	.356 ***	.503 ***
父親	信頼	.514 ***	−.247 ***	.386 ***	.428 ***	−	−.330 ***	.718 ***	.844 ***
	疎外	−.341 ***	.637 ***	−.306 ***	−.518 ***	−.544 ***	−	−.301 ***	−.732 ***
	コミュニケーション	.410 ***	−.171 ***	.496 ***	.409 ***	.724 ***	−.415 ***	−	.808 ***
	愛着	.506 ***	−.442 ***	.457 ***	.544 ***	.895 ***	−.802 ***	.822 ***	−

（対角線を挟んで右上半分は男性・左下半分は女性：$^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$）

ニケーションの相関は強く、信頼感と疎外感はやや弱い負の相関を、コミュニケーションと疎外感は有意ではあるがかなり弱い相関を示した。この結果は、井上ら（2006）の結果ともよく符合していた。母親、父親とも下位尺度の内部相関は、母親と父親への愛着の下位尺度間の相関よりも強い関連を示した。女性では、全ての組み合わせに有意な相関が見られたのに対して、男性では母親のコミュニケーションと疎外感、母親の信頼感やコミュニケーションと父親の疎外感の相関が有意ではなかった。

IPAの下位尺度や愛着得点と養育態度、愛着スタイル、心理的健康度の諸変数の間の相関分析を行った結果をTable 5に示した。IWMの三つの下位尺度との相関を見ると、女性においては、肯定的な愛着（信頼感、コミュニケーション）は肯定的なIWM（安定）と正の相関、否定的・不安定なIWM（アンビバレント、回避）とは負の相関を示すなど、理論的に妥当な方向での有意な相関が得られたが、男性では母親との肯定的な愛着の下位尺度との相関がなく、アンビバレント型得点とは全く有意な相関を示さなかった。見捨てられ不安や親密性の回避とも同様に、女性の方が男性よりもIPAの下位尺度と強い相関を示した。

Table 5　IPAと他の愛着尺度、養育態度尺度、心理的健康の各下位尺度との相関分析結果

			愛着型			成人愛着スタイル		養育態度				心理的健康			
			安定型	アンビバレント型	回避型	見捨てられ不安	親密性の回避	父親 care	母親 care	父親 protection	母親 protection	特性不安	状態不安	自尊感情	抑うつ
度数		男性	399	402	405	418	412	416	430	415	425	396	396	403	270
		女性	428	429	431	493	496	504	510	503	518	418	418	425	338
男性	母親	信頼	.092	−.150 **	−.085	−.202 ***	−.109 *	.150 **	.143 **	−.058	−.104 *	−.075	−.111 *	.138 **	−.062
		疎外	−.231 ***	−.086	.236 ***	.322 ***	.151 **	−.148 **	−.255 ***	.151 **	.183 ***	.130 *	.050	.037	.188 **
		コミュニケーション	.043	−.040	−.059	−.003	−.121 *	.154 **	.163 **	−.061	−.107 *	.086	.030	.104 *	.007
		愛着	.200 ***	−.028	−.213 ***	−.212 ***	−.155 **	.188 ***	.237 ***	−.109 *	−.164 ***	−.076	−.058	.069	−.086
	父親	信頼	.127 *	−.087	−.159 *	−.106 *	−.183 ***	.252 ***	.089	−.123 *	−.086	−.102 *	−.031	.111 *	−.056
		疎外	−.257 ***	−.059	.183 ***	.235 ***	.185 ***	−.296 ***	−.179 ***	.170 ***	.112 *	.138 **	.055	−.036	.154 *
		コミュニケーション	.177 ***	−.067	−.116 *	.007	−.159 *	.242 ***	.033	−.038	−.025	−.059	.012	.113 *	−.029
		愛着	.250 ***	−.031	−.199 ***	−.135 **	−.195 ***	.314 ***	.130 **	−.137 **	−.093	−.134 **	−.033	.112 *	−.090
女性	母親	信頼	.300 ***	−.240 ***	−.268 ***	−.269 ***	−.258 ***	.123 **	.162 ***	−.050	−.086 *	−.293 ***	−.280 ***	.268 ***	−.308 ***
		疎外	−.251 ***	.119 *	.322 ***	.362 ***	.274 ***	−.103 *	−.160 ***	.071	.119 **	.208 ***	.147 **	−.065	.333 ***
		コミュニケーション	.279 ***	−.139 **	−.148 **	−.162 ***	−.278 ***	.060	.110 *	.057	.042	−.181 ***	−.170 ***	.214 ***	−.177 *
		愛着	.315 ***	−.180 ***	−.290 ***	−.284 ***	−.274 ***	.094 *	.155 ***	−.007	−.048	−.252 ***	−.221 ***	.193 ***	−.287 ***
	父親	信頼	.228 ***	−.239 ***	−.214 ***	−.188 ***	−.238 ***	.266 ***	.079	−.055	−.014	−.253 ***	−.262 ***	.247 ***	−.246 ***
		疎外	−.263 ***	.132 **	.253 ***	.289 ***	.244 ***	−.290 ***	−.140 **	.120 **	.098 *	.198 ***	.171 ***	−.110 *	.306 ***
		コミュニケーション	.167 ***	−.163 ***	−.072	−.087	−.175 ***	.157 ***	−.007	.057	.067	−.194 ***	−.208 ***	.198 ***	−.188 ***
		愛着	.280 ***	−.206 ***	−.230 ***	−.214 ***	−.248 ***	.268 ***	.087	−.048	−.020	−.261 ***	−.271 ***	.220 ***	−.282 ***

（ $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$：度数は最大値）

養育態度との相関では、性別を問わず、父親への愛着は父親の養育態度との、母親への愛着は母親の養育態度との関連が強かった。careはIPAの肯定的な下位尺度とは正の、疎外感とは負の相関を示した。protectionについて、男性はいくつかの下位尺度で有意な低い相関が見られたが、女性では疎外感が有意な低い相関を示したのみで、IPAの肯定的な下位尺度とは無相関であった。

心理的健康との関連について、女性ではほとんど全ての下位尺度との間に中程度から低い有意な相関が見られ、IPAの肯定的な下位尺度は心理的健康と、否定的な下位尺度である疎外感は心理的苦痛との相関が見られた。しかし、男性ではそれより低い相関か無相関のものも多く、状態不安とは全くの無相関であり、女性において強い関係性が見られたのと対照的であった。

研究 2

方　法

調査協力者

東海圏の学部大学生233名（男性56名、女性169名、無記入 8 名：平均年齢20.54歳）を対象とし、 4 週間から 5 週間の間隔で二度の質問票調査を実施した。研究 1 と同様に、心理学関連科目の講義中に口頭で同意を得た上で、集団法により無記名で実施した。二回の結果をマッチングするために、整理番号を付した。二回とも回答が得られたのは123名（男性20名、女性100名、無記入 3 名：平均年齢20.70歳）であった。調査時期は2008年10月から11月であった。

尺　度

研究 1 と同様のIPA日本語版25項目を使用した。本研究で使用しない尺度が20項目含まれていた。

結　果

一回目と二回目の得点を元に、研究 1 で得られた通りの三つの下位因子を算出した。その結果、母親の信頼感（r＝.82）、疎外感（r＝.77）、コミュニケーション（r＝.89）、愛着得点（r＝.90）、父親の信頼感（r＝.83）、疎外感（r＝.81）、コミュニケーション（r＝.79）、愛着得点（r＝.89）の全てで十分な値が得られたため、再検査信頼性が確認された。

考　察

IPA 日本語版の作成と信頼性の検討

本研究では、IPA 日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することが目的であった。IPA 日本語版の因子構造は、ほぼ先行研究に等しくなった。原版では、信頼感には項目 1 、 2 、 4 、12、13、20、21、22 と逆転項目として 3 、 9 の 10 項目が含まれていたが、日本語版では 1 、 2 、 4 、12、13、20、22 の 7 項目となり、21 は削除、 3 、 9 は疎外感に含められた。疎外感は原版では 8 、10、11、17、18、23 の 6 項目であったが、日本語版では 3 、 6 、 8 、 9 、10、11、17、18 の 8 項目となり、23 は削除、 3 、 9 は信頼感から、 6 はコミュニケーションから編入された。コミュニケーションは原版では、 5 、 7 、15、16、19、24、25 と逆転項目として 6 、14 の 9 項目であったが、日本語版では 5 、15、16、19、24、25 の 6 項目となり、 7 は削除、 6 、14 は疎外感に含まれた。総じて見ると、全ての逆転項目が疎外感に含まれた以外は、ほぼ原版通りの因子構造が抽出されたと言える。逆転項目は、否定的な意味合いの記述からなっており、同じく否定的な文章で構成される疎外感に含まれてしまったことはやむを得ないと思われる。

先述したように、Armsden & Greenberg（2004）は、IPPA のマニュアルの中で、愛着の因子構造が父親と母親で若干異なっていることを注記し、さらなる研究の必要性を説いているが、具体的なデータは公開されていない（Greenberg, 2008, personal communication）。ただし、因子構造が異なると表現されているが、父親に対する愛着と母親に対する愛着では、幾つかの項目が別の因子に含まれていたに過ぎず， 3 因子構造が崩れている訳ではないため、この表現は不適当であろう。本研究では、父親と母親で異なる因子に含まれる一項目を除外した結果、両親で因子構造が同一になった。尺度としての汎用性を考慮した場合、両親で異なる算出方法を用いるのは煩雑になるため、その項目を削ることになったとしても共通の因子構造を持たせ、含まれる項目も揃えることが望ましいと考えられる。

下位尺度の性差を検討した結果、親の性別にかかわらず疎外感は男性の方が、コミュニケーションは女性の方が有意に高かった。愛着得点は、母親について女性の得点の方が有意に高く、全体的には男性よりも女性の方が親との愛着関係が良好であることが示された。こうした結果は先行研究とも一致しており、例えば佐藤（1993）は、親への愛着の「不信・拒否」は男子のほうが高く、「安心・依存」は女子の方が高いことを報告しているし、Skolnik（1985）は、幼児期の親への愛着とその後の対人関係の持ち方との関連についての縦断研究で、男子の方が否定的な影響を受けやすいことを示唆している。また、高木（1994）でもほぼ同様の性差が報告されている。本研究の IPA 日本語版でも同様の結果が得られたことは、本尺度の妥当性を補強するものであると言える。

IPA 日本語版の下位尺度の内的整合性を検討するために、下位尺度毎に信頼性係数を算出した結果、どの因子についても高い値が得られた。これにより、本尺度は十分に高い内的整合性を有していると言える。さらに、研究 2 から再検査信頼性も十分な値であることが確認された。さらに、内部相関の分析からも、先行研究（井上ら, 2006）と同様な相関が見られ、両親間の値は同じ親に対する下位因子同士の相関値よりも低かったという結果が得られていることからも、IPA の信頼性が確認されたと言える。

IPA 日本語版の妥当性

IPA 日本語版の理論的な妥当性を検討するために、愛着、養育態度、心理的健康との関連について検討した。その結果、これらの変数と理論的に想定される方向で相関関係を示すことが分かり、IPA の妥当性が確認されたが、性別による違いが

見られ、特に女性において先行研究や予測と同様の結果が見られた。

愛着との関連では、信頼感やコミュニケーションといった肯定的な因子は安定型得点と正の相関を、否定的な愛着関係を示す疎外感は負の相関を示した。しかし、男性においてアンビバレント得点とはほとんど無相関であり、有意な相関も女性より係数が低かった。また、見捨てられ不安や親密性の回避との関連も、先行研究（Moller et al., 2003）と同様かそれよりもやや強い相関を示し、その傾向は女性の方が男性よりも強かった。このことは、男性においては親との愛着関係が、現在の内的ワーキングモデルの有様や一般他者に対する愛着スタイルとは、ある程度独立していることを示している可能性を示唆している。男性は女性と比較して、社会的にも文化的にも親からの精神的自立を期待される程度が未だに強いことも一つの要因として考えられる。ただ、性別を問わず母親の疎外感は他の下位尺度に比較して、見捨てられ不安と比較的強い関係を示した。これは特に心理的健康と関連の深い愛着の主要次元が、青年期においても母親との愛着の質にある程度依存していることの証左となると思われる。

養育態度との関係では、careはIPAの肯定的側面と正の相関が，否定的側面とは負の相関が見られ、protectionは疎外感とのみ一貫して負の相関が見られた。careはIPAで測定される愛着の全ての要素と関連するが、protectionは肯定的な愛着の側面とは関連しないようである。この結果は親への愛着の否定的側面が，養育態度の否定的要素と関連すると予測した通りであったが、protectionとの相関係数が小さいことは、本研究ではPBIの原法通りに2因子解を採用したことに起因しているかもしれない。最近の研究ではPBIは3因子構造が提唱されており（竹内ら, 1989; Kendler, 1996; Murphy et al., 1997; Sato et al., 1999）、protectionはさらに2つの因子に分けて解釈する方が優れている可能性がある（井上ら, 2006）。今後、さらなる研究が必要であろう。

心理的健康との関係では、先行研究（福井・河合, 2005; 河合・福井, 2005）で報告された通り性差が見られた。女性では予測された通り，親への愛着の肯定的な側面との間には正の、否定的な側面との間には負の相関がそれぞれ見られた。しかし、疎外感は自尊感情とは無相関であった。対照的に、男性ではいくつか低い相関が見られたものの、全体的に親への愛着が心理的健康に影響を及ぼす程度はかなり小さく、状態不安に至っては、全く相関が見られなかった。女性においてはIPAの基準関連妥当性は確認されたと言えるが，男性についてはやや不明瞭な結果となった。

こうした性差について、*t*検定の結果を見ると、男性の方が有意に状態不安、特性不安、抑うつ得点が低く、自尊感情が高いことが示されている。また、回避型得点や、親密性の回避得点も男性の方が有意に高いことから、心理的苦痛について男性の方が小さく見積もっている可能性が高い。従来から、心理的苦痛を表明する程度には性差が見られることが分かっており、IPAの肯定的な要素も男性の方が有意に低いため、両変数の分散が小さくなることにより、相関が見られなかった可能性もある。さらに、アレキシサイミア傾向や社会的な表示規則の影響、回避・否認などにおける性差といった本研究では測定されていない要因が影響している可能性も考えられる。こうした諸変数を統制した研究によって、愛着の心理的健康への寄与の実態が明らかになるだろう。

本研究により、IPA日本語版の信頼性と妥当性はほぼ確認できたと言える。今後、本尺度を用いて、青年期における親への愛着が、心理的健康のみならず、対人関係や適応行動、ストレス過程などに与える影響について研究が進展することを期待したい。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, R., & Wall, S.（1978）. *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erbaum.

安藤智子・遠藤利彦（2005）. 青年期・成人期のアタッチメント. 数井みゆき・遠藤利彦（編） アタッチメント 生涯にわたる絆. ミネルヴァ書房. pp.127-173.

Armsden, G. C., & Greenberg, M. T.（1987）. The Inventory of Parent and Peer Attachment: Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 427-453.

Armsden, G. C., & Greenberg, M. T.（1989）. *The Inventory of Parent and Peer Attachment: Preliminary test manual.*（Available from Armsden, G. C., Department of Community Health Care Systems, University of Washington, Seattle.）

Armsden, G., & Greemberg, M. T.（2004）. *Scoring manual for the Inventory of Parent and Peer Experience*. Unpublished manual, College of Health and Human Development, Pennsylvania State University.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M.（1991）. Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology,* **61**, 226-244.

Bowlby, J.（1969）. *Attachment and Loss, Vol. 1*, N. Y.（ボゥルビィ, J. 黒田実郎他（訳）（1976）母子関係の理論Ⅰ 岩崎学術出版社)

Bowlby, J.（1973）. *Attachment and Loss, Vol. 2*, N. Y.（ボゥルビィ, J. 黒田実郎他（訳）（1977）母子関係の理論Ⅱ 岩崎学術出版社)

Bowlby, J.（1980）. *Attachment and Loss, Vol. 3*, N. Y.（ボゥルビィ, J. 黒田実郎他（訳）（1981）母子関係の理論Ⅲ 岩崎学術出版社)

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R.（1998）. Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In. J. A. Simpson, & W. S. Rholes（Eds）, *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. pp.46-76.

Cotterell, J. L.（1992）. The relation of attachments and supports to adolescent well-being and social adjustment. *Journal of Adolescent Research*, **7** , 28-42.

Engels, R. C. M. E., Finkenauer, C., Meeus, W., & Dekovic, M.（2001）. Parental attachment and adolescents' emotional adjustment: The associations with social skills and relational competence. *Journal of Counseling Psychology*, **48**, 428-439.

藤井まな（1994）. Parental Bondに関する基礎的研究－育児ストレスとの関連性－. 関西学院大学教育学科研究年報, **20**, 89-103.

福井義一・河合三奈子（2005）. 認知された養育態度が対人困難と心理的健康に与える影響. 日本心理学会第69回大会発表論文集, 158.

Haigler, V. F., Day, H. D., & Marshell, D. D.（1995）. Parental attachment and gender-role identity. *Sex Roles*, **33**, 203-220.

Hazan, C., & Shaver, P.（1987）. Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511－524.

井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江・斎藤こずゑ（2006）. 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ－PBIとIPAの尺度の再検討－. 東京家政大学研究紀要, **46**, 245-251.

河合三奈子・福井義一（2005）. 青年期における内的作業モデルと心理的健康との関連. 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 293.

Kendler, K. S.（1996）. Parenting: A genetic-epidemiologic perspective. *American Journal of Psychiatry*, **153**, 11-20.

北村俊則（1995）. 精神症状測定の理論と実際：評価尺度質問票面接基準の方法論的考察（第 2 版）. 海鳴社.

久保 恵（2003）. 情緒的対人情報処理と内的ワーキングモデル. 風間書房.

Lapsley, D. K., Rice, K. G., & FitzGerald, D. P.（1990）. Adolescent attachment, identity, and adjustment to college: Implications for the continuity of adaptation hypothesis. *Journal of Counseling & Development*, **68**, 561-565.

Lyddon, W. J., Bradford, E., & Nelson, J. P.（1993）. Assessing adolescent and adult attachment: A review of current self-report measures. *Journal of Counseling & Development*, **71**, 390-395.

Main, M., & Goldwyn, R.（1984）. Predicting rejection of her infant from mother's representation of her own experience: Implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse and Neglect*, **8**, 203-217.

Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J.（1985）. Security in infancy, childhood, and adulthood: a move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**（1 & 2, Serial No. 209), 66-104.

Moller, N. P., Fouladi, R. T., McCarthy, C. J., & Hatch, K. D.（2003）. Relationship of attachment and social support to college students' adjustment following a relationship breakup. *Journal of Counseling and Development,* **81**, 354-369.

Murphy, E., Brewin, C. R., & Silka, L.（1997）. The assessment of parenting using the parental bonding instrument: Two or three factors? *Psychological Medicine*, **27**, 333-342.

中尾達馬・加藤和夫（2004a）. 成人愛着スタイル（ECR）の日本語版作成の試み. 心理学研究, **75**, 154-159.

中尾達馬・加藤和夫（2004b）. “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.

西本幹子（2001）. 青年期における父親・母親に対する愛着関係と対人コンピテンスに関する研究. 追手門学院大学心理学論集, **9**, 1 - 9 .

Noom, M. J., Dekovic, M., & Meeus, W. H. J.（1999）. Autonomy, attachment and psychosocial adjustment during adolescence: a double-edged sword?. *Journal of Adolescence*, **22**, 771-783.

大井京子・西村純一・井森澄江・井上俊哉・斎藤こずゑ（2006）. 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅲ：愛着および親の養育態度の検討. 東京家政大学研究紀要, **46**, 253-261.

Papini, D. R., & Roggman, L. A.（1992）. Adolescent perceived attachment to parents in relation to competence, depression, and anxiety: A Longitudinal Study. *Journal of Early Adolescence*, **12**, 420-440.

Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B.（1979）. A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychiatry*, **52**, 1 -10.

Radloff, L. S.（1977）. The CES-D Scale: A Self-report depression scale for research in the General Population, *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-401

Rosenberg, M.（1965）. *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.

佐藤朗子（1993）. 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連. 名古屋大学教育学部紀要, **40**, 215-226.

Sato, T., Narita, T., Hirano, S., Kusunoki, K., Sakado, K., & Uehara, T.（1999）. Confirmatory factor analysis of the Parental Bonding Instrument in a Japanese population. *Psychological Medicine*, **29**, 127-133.

Skolnic, A.（1985）. Early attachment and personal relationships across the life course. *Life-span Development and Behavior*, **7**, 173-206.

島　悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘（1985）. 新しい抑うつ性自己評価尺度について. 精神医学, **27**, 717-723.

清水秀美・今栄国晴（1981）. State-Trait Anxiety Inventoryの日本語版（大学生用）の作成. 教育心理学研究, **29**, 62-67.

Simpson, J. A., & Rholes. W. S.（Eds）（1988）, *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press.

Spielberger C. D., Gorsuch R. L., & Lushene R. E.,（1970）. *Mannual for State-Trait Anxiety Inventory*（*Self-Evaluation Questionnaire*）. Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.

高木信子（1994）. 青年期の愛着の諸相に関する基礎的研究. 教育学科研究年報（関西学院大学）, **20**, 43-55.

竹内美香・鈴木忠治・北村俊則（1989）. 両親の養育態度に関する因子分析的研究. 周産期医学, **19**, 108-112.

詫摩武俊・戸田弘二（1988）. 愛着理論からみた青年

の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試み―. 東京都立大学人文学報, **196**, 1 -16.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面. 教育心理学研究, **30**, 64-68.

Wilkinson, P. B., & Walford, W. A.（2001）. Attachment and personality in the psychological health of adolescents. *Personality and Individual Differences*, **31**, 473-484.

謝　辞

本研究の実施に当たり、データ収集にご協力下さった大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科の卒業生の皆様（三宅由晃さん、高橋まどかさん、深井福子さん、楢山紗世さん、平野由佳さん、岡崎剛さん、湯浅俊治さん、岡田信吾さん）と、現甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻博士後期課程の山下由紀子さんに心からお礼申し上げます。